



一本松



藪内 佐斗司

去年の11月、岩手県の陸前高田を訪れた。3月の大震災と津波で壊滅的な被害を蒙った東北の町のひとつだ。海岸の防風林のうち、たった一本だけ残っていた松が、「陸前高田の一本松」と呼ばれ、ひとびとの希望の象徴としてマスコミの話題になったことを、ご記憶の方も多いと思う。一時は、被災地のヒーローのような扱いだだったが、残念なことに私が訪れたときには、この松はすでに立ち枯れていた。津波によって地中深く海水がしみ込んだために、当初から生きながらえることは絶望視されていたのだ。私は、葉が茶色くなった松をしばらく見上げた後、松ぼっくりをひとつ拾ってポケットに入れた。

震災前は静かな住宅街であったという広大な被災地には、4、5mの高さに積み上げられた瓦礫が延々と連なっていた。そこに樹木だけが集められた山があり、直径が1m近い松の丸太も混ざっていた。私は普段、ヒノキの角材を使った寄木造りで制作しているのだが、この丸太を見た時、「何かを刻まなくてはいけない」という強い思いに駆られた。千年以上前の仏師たちが巨木から仏像を彫りだした切実な気持が、現実感をもって理解できた。

被災のさなかに、私たちアーティストは無力だった。しかし、再生と復興を考えるときには、為すべきことはたくさんある。私は、2011年を共有したひとりとして、ひとびとに安らぎと喜びをもたらす作品を生み出していきたいと、新しい年に決意をあらたにしている。

(1995年大阪生まれ、彫刻家、東京藝術大学大学院文化財保存学教授)